

子どもとお母さんの 応援団

しぶいこどもクリニック(上池台2丁目)
小児科医 渋井展子 先生

発達障害への支援にも力を注ぐ

小児科医の渋井先生は、小児神経の専門医でもあります。クリニックには3人の臨床心理士がいて、子どもの心や発達についての心配や育児についての相談を受ける、発達心理外来も設けています。また「小児科は子どもとお母さんの2人を診る科」と考え、乳児健診タイムには栄養士にも来てもらい、食育にも関わります。クリニックを「地域での子育て応援団」と自認する渋井先生が今、特に力を注いでいるのは、大田区の発達障害児とお母さんの支援。大田区には就学前の子どもを支援する「こども発達センターわかばの家」しかなく、その後小、中、高校と就労までを支援する施設の必要性を小児科の医師たちと共に訴えています。

田園調布医師会の理事も務め、大田

区が委託する東邦大学医療センター大森病院の「子ども平日準夜間救急」や、荏原病院の「土曜準夜間小児救急」にも参加し、大田区の子どもとお母さんの安心のために、日々奮闘しています。

医学部進学を父親が反対

渋井先生が医学部を受験した当時は、女性医師が1割もない時代。医学部進学を父親に「女性として幸せになれない」と反対され、一度は経済学部に進みますが、半年でやはり医師になりたくてこっそり予備校に通い、合格してから父親もやっと賛成してくれたそうです。就職の際も小児科の教授に「5年間結婚しないなら採用」と言われ、29歳まで独身。その後結婚、出産、育児をしながら医師を続けますが、当時は出産休業もたったの14週間。大学院生だった先生は、保育園とベビーシッターの費用に「研修医時代の安いお給料の貯蓄」のほとんどを使いながら仕事と両立したのだとか。困難な時期を共に乗り越えたのが、脳外科医であり、現在は国立がん研究センター副院長でもある夫でした。育児の

大変な時に助け合い、今でもとても仲良しのご様子。

「出産後、自分の親を全面的に頼る女性もいますが、私の場合は父に『母をあてにし過ぎないように』とくぎをさされたので、夫と協力し合い工夫しながら当直や派遣もやり通しました。当時、仕事と家庭のどちらも十分やれていないというジレンマもありましたが、母親も小児科医だった夫に『仕事だけでは90点取るのも難しいけど、仕事と家庭の両方を頑張っているのだから、各70点でも合わせたら140点じゃない！絶対に戦線離脱するな』と言われ、『この人、いいヒトだなあ』と(笑)救われたこともありました」。



しぶいこどもクリニック(上池台2丁目)小児科医
渋井 展子 先生

女性であることを 活かせる小児科医

夫との二人三脚で育てた娘と息子も成人し、2人とも医療の道へ。今、若い女性医師に聞かれたら「止まらな

いでやっていくことが大事」と答えています。「女性医師は3分の1が独身、3分の1が離婚。4割しか普通に結婚生活が送れていない。家庭との両立は大変ですが、私はできれば女性の楽しさも十分味わう人生の方がいいと思っています。女性であることをハンディでなく、楽しみながら生きる。一生懸命やる人は周りが自然に応援してくれるはず。パートナーにも協力しようと思わせるフアイトを持つて欲しい」と先生。小児科医の仕事は女性であることが自然に活かせる、とも。今は「受診に訪れるお母さんのお母さんの立場で助言もできるので、50代、60代の小児科医もなかなか素敵。医療に携わる深い喜びをまた新たにしている」そう。

「日本では政治・経済界をはじめ、女性が重要なポストを占める割合が、まだまだ少ない。けれど若い男性の意識が変わりつつあることを、後輩の女性医師や長女の伴侶、患者さんの父親から感じ、頼もしく思っています。これからの日本は女性の活躍なしには成立しないのではないのでしょうか」と先生。まだまだ現役で、大田区の子どもとお母さんを支えて欲しいものです。